

ちのいちば  
知の市場の輝き

2010年1月1日

知の市場会長

増田 優



「知の市場 (FMW : Free Market of · by · for Wisdom)」は、「互学互教」の精神のもと「現場基点」を念頭に「社会学連携」を旗印として実社会に根ざした「知の世界」の構築を目指して人々が自己研鑽と自己実現のために自立的に行き交い自律的に集う場とすることを理念とし、自立的で開放的な協働関係を形成しながら人々が自己研鑽と自己実現のために立場を越えて自ら活動する場 (Voluntary Open Network Multiversity)である。

そして、総合的な学習機会の提供、実践的な学習機会の提供、十分な情報提供と受講者の自己責任による自由な科目選択、大学・大学院に準拠した厳しい成績評価という4つの基本方針のもとに、活動を展開している。

従来ややもすると学校教育法に基づく学部や大学院の教育が正規の教育とされ、その一方でそれ以外の教育は副次的なものとして扱われてきた。即ち、社会人教育は学部大学院の教育とは全く別物の一段格下のものであるかのように位置づけられてきた。その誘因として、知の市場が1科目は120分授業15回で構成し2単位相当として大学・大学院に準拠した厳しい成績評価を行ってきたのに対して、これまで行われてきた他の社会人教育が色々な点で学部大学院の教育と比較して不十分な点があったことも否めない。知の市場の活動の広がりがひとつの契機になったかどうかは定かではないが、近年、しっかりとした体系を有する社会人教育には学校教育法に基づく履修証明を発行できる制度が誕生した。しかしまだまだ壁は厚い。

また、日本ではこれまで大学における研究業績を中心とする教員資格審査を経た者だけが教育の任を担う正規の教員として位置づけられてきた。産業の現場で長年経験を積み成果を上げてきた技術者や経営者でさえ、工学部や経営学部において教鞭をとることは認められなかった。同様に政治や行政に携わり現場で政策を立案したり実施したりと役割を果たしてきた者が公共政策の教育に携わることも稀であった。こうした状況が学部大学院教育の歪みをもたらしてきた。そのみならず、逆に、実社会の現場の活動が経験至上主義に陥り学問的な体系の裏打ちの乏しい透明性の低いものになってしまう誘因になってきた。ここにも高い障壁があり、こうした構図が日本の教育を社会の現場から遊離させ弱体化してきた。

今や、社会人向けの教養教育としては始まった知の市場は、プロ人材の育成へと翼を広げ、さらに学生院生教育へと大きく羽ばたいている。知の市場の講師陣の大半は実社会で実践を積んできた人々であり、従来の狭い定義による教員ではない。講師陣を組織し科目の内容を策定する連携機関もそして講座を開講する開催機関も、必ずしも学部や大学院の教育を司る正規の教育機関ではない。しかし、知の

市場の活動は社会から高く評価され強い支持を得て拡大発展をしている。知の市場は従来教育活動と無縁であった個人や機関が講師や連携機関、開講機関として教育に参画する機会を拓いた。これまでの教員と非教員、学校教育と社会人教育、教育機関と非教育機関という分厚い壁を溶かし、その融合を起こしつつある。

野球は投手と捕手だけではなり立たない。内野手、外野手などそれぞれ違う役割を果たすそれぞれの野手がいる。さらにホームランを打つバッターもバントを得意とするバッターもいる。これら全員が真剣に参画してはじめて人々に感動を与える野球が成立する。少年野球然り高校野球然りプロ野球然りである。それら全ての水準が高まってはじめて、世界の場で戦い得るチームができ大リーグで活躍する選手が登場する。少なくとも野球の領域では日本社会はそうしたことを望み得る水準にまで達している。そしてそのための教育は現場の臨場感の中で行われている。毎夏甲子園で繰り広げられる熱戦に日本社会の多くの人々がくぎ付けになり目を凝らして見入るのも、箱根駅伝が新春を飾る一大事業として人々の心に定着しているのもその所以である。そして少年野球や大学駅伝に典型的に見られるように多様な人々の自発的な参画によって広大な裾野が支えられている。教育においてもこれらのことを噛みしめなければならない。

知の市場は一部の人々により支えられてきた教育を社会の現場を担う多くの人々が参画する教育に変革する活動である。知の市場は一部の機関の役割であった教育を、社会を構成する全ての機関が当然の役割として参画する教育に変革する活動である。知の市場は現場の臨場感の中で社会の全員参加によって教育を行う新しい体制を構築する活動である。自立的で開放的な協働関係を形成しながら人々が自己研鑽と自己実現のために立場を越えて自ら活動する場(Voluntary Open Network Multiversity)として知の市場を位置付けている所以はここにある。

過去 5 年間先ず、技術革新と生活や社会の変革に関して或いは化学物質や生物のもたらすリスクの評価や管理に関して広範な知識を備え社会においてそれぞれの立場で役割を果たす人材の育成のために「化学生物総合管理の再教育講座」として展開を図ってきた「知の市場」は、このような社会の背景と教育の現状を踏まえて 2009 年度から現代の社会と世界を理解するために必要な広範な分野に視点を拡大するべく新たな展開を図った。その結果、新たな日の出を迎え、輝く日差しの中で次第にその輪郭が明らかになりつつある。2010 年度はさらに全国に拠点を増しつつ「知の市場」は進化しつつある。

